

「人文」諸科学の領域において科学的方法が有効であるという考え方は、いつも異論が唱えられてきたのであるが、この異論がはじめて起こってきたのは、研究される構造の論理が科学的論理とは異なる論理であるようなレヴェル自体だということを見無視するわけにはゆかない。その論理は、言語の（そしていうまでもなく詩的言語の）論理のことであるといつてもよいのであるが、「エクリチュール」（わたしはダイナミックな文字 *gramme dynamique* として、詩的意味の形成を察知させる文学を念頭においている）のおかげで、その論理が明らかにされたのである。そうであれば、文学の記号論には二つの可能性が提示される。沈黙して断念するか、それとも、このもうひとつの論理、すなわち現在の記号論の関心の中心にある詩的意味の構築と同型のモデルを形成するための努力を重ねるか、のいずれかである。

構造分析がさしあたって掘りどころとしているロジャ・フォルマンもまた、その探究が文学外、科学外の理由によって終息しようとしていたときには、同じ二者択一を迫られていた。それでも研究

テクスト空間における言葉

さまざまなジャンル（テクスト）における言葉の特有のあり方を、（文学的な）知的操作のさまざまな様態を表わす単位「能記」として確立することによって、詩の分析は、今日の「人文」諸科学の

するただひとつの方法は、読むことと書くことをとおして、いいかえれば意味構造をもうひとつ別の意味構造に連繫させ、あるいは対立させて作り上げてゆくことをとおして、この抽象化を侵犯することになる。歴史とモデルは、それらのテクストの下部構造のなかに書かれ、また読み取られる。それゆえ、詩の言葉は、多面的な結合が可能であり、多面的に決定されていることによって、コード化された言説の論理を凌駕する論理に従っているものであり、こうした論理が十分に実現されるのは、公式的な文化の周縁においてではない。したがって、ベンチャーンはこの論理の根を求めてカイニガムへと赴くのであるが、だから、この論理の研究に取り組んだのはかれが最初となるのである。カイニガムの言語は、文法と意味によって厳しく拘束された言語を支配する法則を破っている。そしてそのこと自体によって、社会的、政治的異議申し立てになっている。それは、公式的な言語コードへの異議と公式的な法への異議が等価であるというのではなくて、同一であるということなのである。

はつづけられて、ごく最近、ミハイール・ベンチャーンの諸分析として実を結んだ。かれの分析は、もともと特筆すべき出来事のひとつであり、この学派を克服しようとするもつとも力強い試みのひとつを代表している。ベンチャーンは、言語学者たちの技術的な厳密さをもたず、激情を秘めた、ときには予言者のようににもみえる文章を駆使して、いくつかの根本的な問題と取り組んでいるが、その問題は、今日の物語の構造論の研究が立ち向かっているものである。ほぼ四十年前にかれが粗書きしたテクストを読むことを、いまなお必要なことにしているのである。著作家でもあれば「学究」でもあるベンチャーンは、もろもろのテクストの静態的な切り分けに替えて、文学の構造が存在しているのではなく、むしろそれが別な構造に照らして形成されてゆく、そういうモデルを立てた最初のひとりである。構造主義をこのようにダイナミックなものにしてゆくには、ただひとつの捉え方から出発してゆくはかない。その捉え方からみれば、「文学の言葉」はひとつの点（固定した意味）ではなくて、いくつものテクストの表面の交錯、いくつもの文^{テクニカル}章^{テクニカル}が、すなわち作家、受け手（すなわち登場人物）、当時のあるいは先行する文化のコンテクストが交す対話となる。

言葉のあり方という観念を構造の最小単位として導入することで、ベンチャーンはテクストを歴史と社会のなかに位置づける。そして歴史と社会それ自体もテクストとみなされており、作家はそれを読み取り、また書き改めることによってそこに自らを挿入する。通時態が共時態に変換され、この変換の光に照らされると、線的な歴史はひとつの抽象物としてみえてくる。とすれば、作家が歴史に参加

三つの次元とは、書く主体、その受け手、外部のテクスト（対話における三つの要素）である。したがって、言葉のあり方は次のように定義される。①水平的にみれば、テクストにおける言葉は、書く主体とその受け手との両方に属している。②垂直的にみれば、テクストにおける言葉は、それに先立っている同時点の文学資料の全体へと向けられている。

しかし書物の言説の宇宙においては、受け手はもっぱら言説それ自体としてそこに含まれている。したがって、受け手は、作家が自分自身のテクストを書くときに照合するあの別な言説（別な書物）と融合している。それゆえ、水平の軸（主体－受け手）と垂直の軸（テクスト－コンテクスト）は合致しているであって、その結果ひとつの重要なことが明らかになる。それは、言葉（テクスト）はいくつもの言葉（テクスト）の交錯であり、そこには少なくとももうひとつの言葉（テクスト）が読み取れる、ということである。それにパンチンはこの二つの軸を、それぞれ対話および対立するものと

の、依存（*zavisimost* = 両面価値性）と呼ぶのであるが、明確には区別していない。しかし、この厳密さの欠如は、むしろパンチンによって文学理論のなかにはじめて導入された発見を示している。すなわち、どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、もうひとつの別なテクストの吸収と変形にはかならないという発見である。相互主体性という考え方にかわって、相互テクスト性（*intertekstualnost* = テクスト連関）という考え方が定着する。そして詩的语言は少なくとも二重のものとして読み取られる。

このように、テクストの最小単位としての言葉のあり方は、構造モデル（テクスト）を文化的（歴史的）環境に結びつける媒介項であると同時に、通時態を共時態（文学構造）に変換する調整項でもあることがわかる。このあり方という觀念自体によって、言葉に振りが生じる。つまり言葉は対話を交している意味要素の集合としてあるいは対立しながら併存している要素の集合として、三つの次元（主体－受け手－コンテクスト）において機能している。それゆえ、文学記号論の課題は、テクストの群れが交す対話空間のなかでの言葉の（シークエンスの）さまざまな結合の仕方に対応する形式表現を見出すことになるであらう。

さまざまな文学のジャンメル（テクスト）における言葉の特有の働きを記述するためには、言語学を越えた言語研究の方法が必要になる。それは、①文学のジャンメルを、「言語の下にあるが、かならず言語とともに意味を表わす」という不純な記号体系として捉えること、②言説の大きな単位、つまり

文、応答、対話などによって行なわれる操作、——かならずしも言語モデルには従わなければならない。意味論の拡張という原理によって根拠が与えられる操作である。こうして次のような仮説、すなわち、文学のジャンルの進化はいずれも、言語構造をさまざまなレベルで無意識のうちに外在化するものであるという仮説を立てて、証明することもできないわけではない。小説は、とくに言語に内在する対話を外に表わしている。⁽⁴⁾

言葉と対話

「言語に内在する対話」という考えは、ロシア・フォルクリストたちの関心の的であった。かれらは言語によるコミュニケーションの対話的特質を重要視して、⁽⁵⁾ 独語、つまり共通の言語の「萌芽形態」も、対話のあとにくるものとみなしていた。かれらのなかには、「心的状態の等価物」⁽⁷⁾としての独話的言説と「独話的言説の芸術による模倣」⁽⁸⁾である物語とを区別するひとたちもいた。ユーリの『外套』についての有名なエイヘンバウムの研究も、同様の考え方から出発している。エイヘンバウムが述べているところでは、ユーリのテクストは、語りの口述形態とその言語特徴（口頭の言説のイントネーション、統辞の構成、それにふさわしい語彙など）に拠りどころを求めている。そうやっ

て、物語における二様の語り方、間接話法と直接話法を設定し、両者の関係は研究してはいるが、エイヘンバウムの考慮に入っていないことがある。それは、物語の作者はたいいていの場合、口頭の言説に拠りどころを求めよりさきに他者の言説に準拠を求めているのであって、口頭の言説はそれからの二次的な帰結にすぎない（他者は口頭の言説の担い手なのであるから）、⁽⁹⁾ ということである。

ベンチンにとって、対話・独話の区分がもつ意味は、フォルクリストが用いるときに込めていた具体的な意味の範囲をはるかに超えている。その区分は、ある物語や戯曲のなかで直接話法・間接話法（独話・対話）の区別に対応していない。ベンチンの場合、対話は独話的なこともあるし、独話といわれるものも往々にして対話的なのである。かれにとって、これらの用語は言語の下部構造に適用されているのであって、この下部構造を研究することが文学テクストの記号論の課題なのである。

この記号論は、言語学の方法にも、論理学の前提にも満足することなく、その両者をもとにして自らを形成してゆかねばならないであろう。「言語学は言語をそれ自体として研究する。つまり対話によるコミュニケーションを可能にしている言語の特有の論理と本質体を研究するが、対話的な関係そのものは考慮の外におく……」。対話的關係は、論理および意味からなる諸關係に解消されるものではない。それら自体には対話としての契機が欠けているのである。それらは、言葉を身にまとい、言葉となり、言葉をとおして表現となって、さまざまな主体のありかとならねばならない。そうしてはじめにそこに対話的關係が現われてくるのである……。対話的關係は、論理および意味からなる諸關係が

訳者略歴

原田邦夫 (はらだ くにお)

1942年生

1965年 名古屋大学文学部卒業

1967年 名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了

現在 愛知県立大学外国語学部助教授

訳書 J. クリステヴァ『中国の女たち』(共訳, せりか書房)

記号の解体学—セメイオチケ 1

定価 2800円

1983年10月22日第1版発行

1984年2月20日第2刷発行

著者 ジュリア・クリステヴァ

訳者 原田邦夫

発行者 佐伯 治

発行所 株式会社せりか書房

東京都文京区後楽2・20・15内野ビル 電話813:8566~7 振替東京5-143601

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

装幀 工藤強勝

1984 © 1098-83102-3894

Σημεωτική—Recherches pour une sémanalyse

by Julia Kristeva

Copyright © 1969 by Éditions du Seuil Japanese translation rights

arranged through Le Bureau des Copyrights Français.

索引

この索引は、本書に提示された基本的な概念についても決定的な理論的働きかけ——を説明したあとで、新たな問題提起を組み立てた。これを接しながらも拡散しているさまざまな取組、その道筋を示そうとするものである。

この索引は、したがって、科学および理論の形成された時代によっても異なっている。本書の作業の最終段階からみわたしたとどるべき本質的な指針を指し示すのである。

ここに示した概念-働きかけのいくつかは、すでに定式化されていたものであるが、本書の作業によって、それゆえ、そのままここにとり上げられている。

読者は、この索引を構成する四つの部分の切りはなしがたいことにお気づきだろう。この系をかたちづくっているにしても、それは、開かれた分析対象を提出しているに

A 記号論の

I 科学および理論としての記号論

1 記号論の出現 ストア派へとさかのぼる。ふたたび歩みをともしする (19, 147-159)。ソシュールの用語 (20)。記号論と諸学の「環の円環」としての学を断ち切る場 (38)。

——理論としての記号論(21-26, 37-38)。メタ理論としての記号論(25-26, 131)。記号論そのものをも含めた言説への問いとしての記号論(23-27, 33, 178, 180)。

——「弁証法的論理」としての記号論(24) 表象および理論としての記号論モデル(36-38)。批判の学-記号論(39)。生産に向きあう記号論(52)。

2 記号論と隣接諸科学 記号論と言語学(20-21, 35, 40-42, 66)。転覆の前提としての隣接諸科学(40)。記号論と数学, 論理学, 精神分析(24, 28)。外をもたない数学の記号と生産性に同型の記号論(107, 134, 147-149)。記号論は, 文芸美学, 修辞学, およびそれらの変種を移動させる(7-19, 53-54)。

3 記号分析 それは記号体系の内部に意味産出というもうひとつの場面を切り開く。構造は, そこから生じるずれた結果であるにすぎない(10, 15, 29, 164-172)。打ちくだかれた構造と意味を産む産出のあいだにいる主体(179)。記号分析の言説と書かれたテキスト(26-27, 180)。

II 記号の母型とその横断

1 記号, 意味, 交換(→第二部参照)

——記号のトポロジー 明示の意味, 共示の意味(26)。意味産出の産出機能をおおう鏡の要素(165, 171)。

——主体, コミュニケーション パラグラマチックな空間における主体の脱中心化, 「ゼロロジックの主体」(136-143)。主体を死においやるテキスト(284-302, 308-314)。唯一のもの, 外, 他者を横断することによってテキストのなかで解体される主体(14-17)。実践-生産性/コミュニケーション-意味作用, という弁別(43-49)。主体-受け手という連鎖における小説の言説(76-79)。

——時間性 記号論はひとつの時間理論として構築されねばならない(23)。テキストにおける「時間-の外」, その現在, 半過去, 名詞化との関係(255-264)。

2 前-意味の生産性

——言語のなかの労働 意味とコミュニケーションにたいする異質性(7

-8)。トランス言語学(61-65)。

——意味を産む実践 第二次モデル形成体系として(14-15, 33)。

——生産 記号体系に生産という観点から取り組む(43-52)。蕩尽としての生産(47)。表象でもなく測定もできないもうひとつの場面(50)。コミュニケーションに対立する生産(43-46)。フロイト以後の記号論の対象(27, 48-52)。

——意味産出 意味を産む連鎖に収まらない労働の剰余(10)。二つの面から捉えられる産出——(1) 言語の織り物の産出, (2) 意味産出を提示する態勢をとる主体の産出(165, 170, 179, 284-300)。意味産出と構造の関係(168-180)。産出機能と生産された意味(176)。

3 生産性としての意味作用には, 対象とみなしうる最小単位はない(「定式の産出」参照)

——対話的言葉 意味産出は記号の母型を移動させる(10-11)。テキストの表面の交差としての対話的言葉(59-60)。主体, 受け手, および書きあらためられる諸テキストのあいだに位置づけられた言葉の空間化(75-79)。

——二重性, 全体は記号を側面から捉える(67, 120-121, 129-130, 134-137)。

——照応関係 表示/非-記号化する数はアナフォリックである(189)。

——間隔 意味/身体(16, 274-280, 285)。切断-関連づけ(253)。飛躍は押印である——ジェノ-テキストとフェノ-テキストの関係(267-278)。

——数, 能記の数的機能 数論的諸関係に基礎づけられたオリエントの超記号論の体系(145, 188-189, 199, 225-227, 303-310)。記号にたいする数(188-192, 227)。外も内もなく能記にして所記である, テキスト的「ノンブラン」は複数の差異からなる(196)。テキストは意味を産む無限を配置する(191-195, 200-205)。意味を産む無限が根づいてゆこうとする書字的/音声的単位は, 意味を産む微分素である(192)。意味産出の位置(165, 192, 313)。無限点における所記と能記の鉤直しとしての意味を産む微分素(192-197)。

B 記号論の実践

1 意味を産む実践の類型学 伝統的な修辞学の置き換え(178)。意味実践の三タイプ、体系的、変革的、パラグラムの(142-144)。意味を産む実践および記号の歴史性としての言説の類型学(80-103)。法としての言表様態と言説の「無限化」との関係(241-244)。

2 カーニヴァル 通常の(表象とコミュニケーションの)言説の論理に対立するカーニヴァル(59, 83)。夢と欲望の構造にたいする関係(83-87)。

3 叙事詩(81-82)

4 メニッペア(89-95)

5 小説 ポリフォニー小説(17, 70, 94)。語りの主体の変身段階としての登場人物(77)。小説——および記号のイデオロギー——はメニッペアにおける対立するものの併存を転置させる——聖刻文字とスペクタクル、テキストと表象(66-72, 94)。反-表象的な現代小説(96-99, 163-164, 180-181)。および、一般的には「定式の産出」を見よ。

C テキストの論理

I テキスト構念の規定にむけて

1 生産性としてのテキスト コミュニケーションの連鎖を突きやぶり、主体の構築をさまたげる(9-14)。意味と主体の萌芽状態にさかのぼる(9, 168-178, 284-290, 296-302)。差異の網の目(13, 120-124)。中心をもたない無数のしるしと間隔(14)。

2 言語を超えたテキスト 部分に分解できるような言表には還元されないテキスト(18)。言語の諸カテゴリーを再編成するテキスト(183, 186, 229, 236, 239, 245, 255-265)。文法法則に違反するテキスト(113-122)。エクリチュール-レクチュール(117)。言語にたいするテキストの異質性(7, 29)。テキストの劇場性(83-87, 91-93)。

3 相互テキスト性 それは相互主体性的テキスト(17, 70, 89-92, 96)。一方におけるコードの多様性(134-141)。抽出説構造を呼び目覚まし、破壊する(207-222)。

4 ダイナミックにされた対象としてのフェノ-テキスト(166-170)。因果性も、自分自身を原因として生じた結果であるスト(172-178)。深層構造と表層構造(168, 17, 175-178)。

II 論理の特殊性

1 詩的論理と伝達的言説の論理との侵犯(13, 119-121)。

——対話関係 言語に内在する対話関係リズムにおいて言説の深層構造と同じひろがりの打ち消しとしての対話関係(76, 89)。のの併存(66-72, 109, 120)。対話関係の

2 パラグラマチスム(109, 185-186, 20(120-130)。パラグラムの網(122-214)。——音声の書跡(125)、意味素的書跡(127)し意味を打ち消す地帯としてのパラグラ

3 詩的言語と無限 連続の濃度(71)。限(71)。現実的無限性(116)。テキストで配置される意味を産む無限性(192-196, 2

4 否定 肯定としての否定(67)。定(67-71, 119-120)。二項対立(132-140)。

——非-離接 小説における非-離接(83

5 言語学的統辞法とテキストの文法(167-172)。テキストの大きな単位とし239, 251)。主語-述語をもつ命題にたい

する名詞化(228-251)。

D 記号分析と唯物論的認識理論

I 歴史

——記号的実践の類型学によって置き換えられる線的歴史性(51)。
層に分けられる歴史(14-15)。パラグラマチックな歴史(109-110, 155-158)。テキストの交差としての言葉をとおしてとらえられる歴史(58)。
対話論理の言葉は通時態を共時態に変形する(59-62)。テキストの両面価値性(66)。テキスト的無限性において意味しうるものとしての歴史(267-269, 280-283)。テキストは表象(和音)として可動の外を指し示す(12)。
意味を産む微分素——意味に収まらないもの, すなわち「物質的歴史」の固執点(186, 189, 193-196, 198-205, 280, 296-302, 309-319)。

II イデオロギー

——イデオロギーは言語のなかの労働を「文学」、「魔術」、「詩歌」として修復する(8)。形式化の理論としての記号論はひとつのイデオロギーへと通じている(37-39)。イデオロギーの科学としての記号論(39-42)。表象かつ労働としてのテキスト(92-94)。イデオロギーと記号表記(17, 178)。唯物論的認識理論の構築のための記号分析の貢献(24-25, 27-28)。